

研究報告：秋田大学医学部保健学科紀要13(1)：83-89, 2005

## 国際交流における短期研修事業の効果的な取り組み —タイの海外研修生の受け入れ経験から—

大澤 諭樹彦 工藤 俊輔

### 要 旨

当専攻では2004年9月24日から23日間にわたりタイから理学療法士の研修生を受け入れた。そこで、今後の海外研修生受け入れの体制作りを寄与することを目的に、研修生受け入れから学んだ経験を紹介し、今後の課題について提案する。今回の研修目的は、地域での健康増進を効果的に進めるための知識と技術を習得すること、理学療法教育について学ぶこと、そして日本の文化・慣習を理解することであった。研修終了後の評価は、研修生による講義に参加した本専攻学生のアンケート結果から、有意義な講義であったと回答を得た。また、研修生からのアンケート結果からも、研修内容が満足いくものであったことが示された。今後の課題は、帰国後の研修成果の評価を実施し、長期的なフォローアップをすることである。将来的には、国立コン・ケエン大学理学療法学専攻と本専攻間の国際交流へと広がっていくことが期待された。

### I. はじめに

当専攻では2004年9月24日から同年10月16日までの23日間にわたりタイ国立コン・ケエン大学 (Khon Kaen University) から理学療法士の研修生を受け入れた。海外研修生の受け入れは、本保健学科として初めての経験であり、多くのことを学ぶ機会となった。

海外研修生受け入れは、本専攻における国際交流・協力への貢献という意味から、今後ますます重要になると思われる。あわせて、「国際的視野を持って医療活動を遂行できる人材の育成」と謳われている保健学科の基本理念の基、本学科学生に対する教育的意義も大きいと考えている。

そこで、今後の海外研修生受け入れの効果的な体制作りを寄与することを目的に、今回の研修生受け入れに際して、筆者らが実施したプログラムと、研修生受け入れから学んだ経験を紹介し、国際交流・協力における今後の課題について提案したい。

### II. 研修生の紹介

今回の研修生は、タイ東部のコン・ケエン県にある国立コン・ケエン大学理学療法学専攻所属の理学療法士であった。研修生の専門分野は筋骨格系理学療法領域で、臨床ではクリニックでのスポーツリハビリテーション、地域における高齢者の健康増進に携わっていた。また、タイマッサージ協会のメンバーとして、タイマッサージの指導的立場にもあった。さらに、Community Based Rehabilitation (地域社会に根ざしたリハビリテーション：以下 CBR<sup>1)</sup> とする) に関わり、地域保健サービスの向上に従事していた。

コン・ケエン大学は1964年に設立された国立大学で、医学部、看護学部などの医学系の学部の他に、農学部、建築学部など16の学部と大学院を持つ、タイ東部の中核大学である。

研修生の所属する理学療法学専攻では、大学院を設置している。また、農村部における CBR プログラムの推進など、地域住民の健康増進に大きな役割を果た

している。

### Ⅲ. タイの概要

タイは東南アジアに位置し、ラオス、カンボジア、ミャンマー、マレーシアに囲まれている。国土面積は51万4千km<sup>2</sup>で、人口は63.5百万人である。言語はタイ語を使用し宗教は95%が仏教である。主要輸出産業は、コンピューター、集積回路等の工業であるが、就

表1 タイと日本の医療、保健、福祉の比較

	タイ	日本
乳児死亡率(出生千対)	20	3
平均寿命(年)男/女	65.3/73.5	77.9/85.1
初等教育就学率(%)男/女	100/96	101/101
人口(百万人)	63.5	127.8
理学療法士数	750	20,000
医師数	22,730	248,611
看護師数	94,048	985,821

文献3), 4) より作成

業人口の約4割を農業が占めている<sup>2)</sup>。一人当たりの国民総所得(GNI)は、6,680米ドルで、日本の26,070米ドルと比較して低く<sup>3)</sup>、医療、保健、福祉の状態も日本に比べ低い状況にある(表1)。

コン・ケン県が位置する東北地域は、タイの中でも特に経済状況が悪く、医療、保健の向上にコン・ケン大学の果たす役割は大きい。

タイの理学療法士協会はアジア理学療法連盟<sup>5)</sup>に加盟しており、2002年にアジア理学療法連盟学会がタイで開催された。その学会に筆者らが参加したことが、今回の研修生受け入れのきっかけとなった。

### Ⅳ. 研修プログラムの概要

今回の研修に要した経費は、日本理学療法士協会の運営する海外研修生奨学金制度<sup>6)</sup>から拠出された。

日本理学療法士協会の海外研修生奨学金制度は1992年に設立され、これまで韓国、パキスタン、ラオス、タイ、ベトナム等から12名を受け入れてきた。過去の研修生の受け入れ機関は、関東、関西など都市部の病

表2 研修プログラムのスケジュール

日時	研修内容	宿泊地
9月24日(金)	成田国際空港着, 秋田市着	秋田大学学術交流会館
9月25日(土)	本学公開講座にて紹介	秋田大学学術交流会館
9月26日(日)	秋田市内観光	ホームステイ
9月27日(月)	研修スケジュールの打ち合わせ, 大学内の説明, 秋田県の医療・保健・福祉事情の説明	ホームステイ
9月28日(火)	秋田大学医学部付属病院見学 専攻内英文抄読会参加, 歓迎会	ホームステイ
9月29日(水)	レポート作成	ホームステイ
9月30日(木)	ケアタウンたかのす見学	ホームステイ
10月1日(金)	介護老人保健施設ニコニコ苑見学, 通所リハ見学	ホームステイ
10月2日(土)	自由	ホームステイ
10月3日(日)	秋田市内観光	ホームステイ
10月4日(月)	理学療法教育についての意見交換, 秋田大学医学部付属病院見学	秋田大学学術交流会館
10月5日(火)	秋田市保健所機能訓練事業見学	秋田大学学術交流会館
10月6日(水)	タイマッサージの講義, 森岳温泉病院見学	秋田大学学術交流会館
10月7日(木)	太平療育園見学 レポート作成	秋田大学学術交流会館
10月8日(金)	授業参加, 意見交換, 秋田県内の研修のまとめ	秋田大学学術交流会館
10月9日(土)	角館観光	秋田大学学術交流会館
10月10日(日)	国際フェスティバル参加	秋田大学学術交流会館
10月11日(月)	東京移動	ホームステイ
10月12日(火)	東京大学医学部付属病院見学	ホームステイ
10月13日(水)	けやきの家見学	ホームステイ
10月14日(木)	第31回国際福祉機器展参加	ホームステイ
10月15日(金)	横浜市総合リハビリテーションセンター見学	成田空港周辺ホテル
10月16日(土)	成田国際空港発	

院・リハビリテーションセンターであったが、今回はじめて地方都市の大学にて研修生を受け入れることとなった。

今回の研修目的は、主に地域での健康増進を効果的に進めるための知識と技術を習得し、タイのCBRの発展に寄与することであった。加えて日本の理学療法教育について学び、コン・ケン大学の教育に活用していくことであった。また、日本の文化・習慣を理解することも研修目的に含まれていた。

研修に向けての準備は、研修生が来日する前から電子メールを利用して始められ、研修生の研修目的を確認しつつ、研修プログラムを立案した。研修生との渡

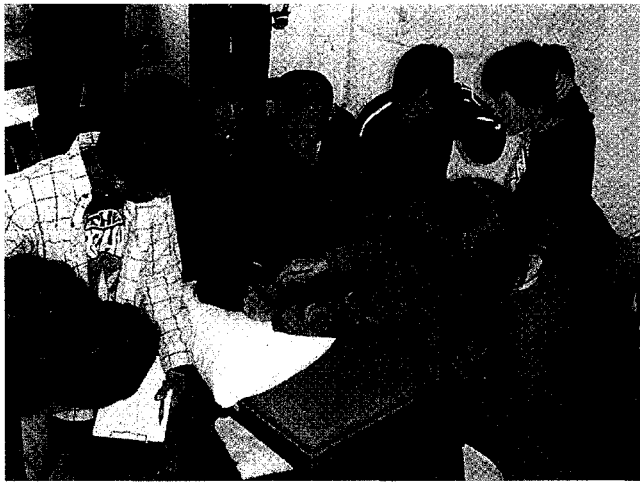


図1 タイマッサージの実演を熱心に見学する学生

航前の電子メールのやりとりは、20回以上にわたった。

研修プログラムは表2に示すとおりである。秋田県の医療・保健システムの理解を目的に、病院、介護老人保健施設、保健所、通所リハビリテーションの見学を主に、研修内容として組み立てた。さらに、医療・保健の地域差を把握する目的で、関東地域での病院、小児施設の見学を研修後半に取り入れた。また、医療・福祉機器の知識を深める目的で、第31回国際福祉機器展への参加をプログラムに取り入れた。

理学療法教育の理解には、本専攻教員との意見交換、授業への参加を取り入れた。加えて、本専攻の学生が国際的視野を広げる機会になることを期待して、研修生によるタイマッサージの講義と実演を行った(図1)。

今回の研修では、研修生から研修後にレポートの提出を課すことで、受け身になりがちな研修を、積極的な研修参加へと促せるように工夫した。また、研修の最終日には、当大学から研修修了証明書を研修生に授与し、研修生の業績にも繋がるように配慮した。

そして、本学教員宅へのホームステイによって、日本文化の体験と理解を深められるように工夫した。

## V. 研修の評価

今回の研修を評価する目的で、タイマッサージの講義に参加した2年生への無記名の5段階評価のアンケートと、研修生へのアンケートとインタビューを実施した。

表3 タイマッサージに関する学生のアンケート結果 自由記載のコメントから抜粋

今回のテーマはあなたにとって興味深いものでしたか？

- ・テレビでしか見たことがなかったので、タイマッサージを実際に見られて良かった。
- ・日本で行なわれている徒手療法とどのように違うのかに興味がある。
- ・タイに興味があった。

今回の講義を受けて、タイの理学療法について興味を持ちましたか？

- ・タイマッサージの他に、どのような点が日本の理学療法と違うのか気になった。
- ・理学療法士が土地によってどのような工夫、やり方をしているのか興味を持った。
- ・タイの文化に基づいた技術を取り入れていて面白かった。

今回の講義はあなた自身の国際的な視野を広めることに役立ちましたか？

- ・タイについて少し知ることが出来たし、もっと様々な国の特徴を知りたくなった。
- ・語学の必要性を感じた。
- ・いろいろな国の文化に触れることは、とてもいい刺激になる。
- ・理学療法の手技についていろいろな国の方法を見ることは勉強になる。

今後も海外の理学療法について、講義を受けたいと思いましたか？

- ・日本だけでなく各国の理学療法を学ぶことで、視野が広がると思う。
- ・もっと自分の視野を広げたい。
- ・ヨーロッパやアメリカの理学療法について知りたい。
- ・戦争、特に地雷による被災者へのリハビリテーションについて知りたい。
- ・スポーツ障害に対する各国の理学療法について知りたい。

### 1. 学生によるタイマッサージ講義の評価

タイマッサージの講義に参加した学生18名のアンケート結果から、大多数の学生が今回のタイマッサージの講義を有意義なものとして受け止めていたことが分かった。

質問項目の「今回のテーマはあなたにとって興味深いものでしたか」では、とても興味深いものと答えた学生が16名で全体の89%を占め、少し興味があったが2名(11%)であった。「今回の講義を受けて、タイの理学療法について興味を持ちましたか」の質問に対しては、おおいに興味を持ったが10名の56%、少し興味を持ったが8名(44%)であった。また、「今回の講義はあなた自身の国際的な視野を広げることに役立ちましたか」には、おおいに役立ったが11名(61%)、少し役立ったが7名(39%)で、「今後も海外の理学療法について、講義を受けたいと思いますか」については、18名(100%)全てがおおいに思うと答えていた。いずれの回答にも、興味を持てなかった、役立たなかったとする回答は0名(0%)であった。

アンケートの各質問に対する、自由記載の結果を表3に示した。今回の講義をきっかけに、タイやその他の国の理学療法について、知見を深めていきたいという意見が多く見られた。学内教育における海外研修生と学生との交流から、グローバルな視点が育まれることが報告されており<sup>9)</sup>、今回の講義も同様に、学生の国際的視野を広げる大きな機会になったことが示された。

### 2. 研修生による研修の評価

研修生自身への研修内容に関するアンケートと、アンケート結果に基づいたインタビューから、今回の研修の成果と課題が明らかになった。アンケートの結果からは、概ね研修内容が研修生にとって、満足いくものであったことが示された(表4)。

研修期間については、23日間では短かったと回答されていた。研修期間は、研修生自身の研修計画に沿って決定されたものの、保健、医療事情の理解と、理学療法教育のシステムの理解を十分に図るには、期間的な制限があったことも事実である。しかし現実的には、奨学金の資金的制限により長期研修が困難であり、また当専攻で研修に関わる人員数に制限があった。このことから、受け入れ機関である本学専攻としては、妥当な研修期間であったと考えている。

研修目的の到達度に対する質問では、おおいに達成されたと回答されていた。研修生へのインタビューでは、日本の、特に秋田県の保健、医療、福祉の状況について、多くの施設見学や当専攻教員との議論を通して、理解を深めることができたと高く評価していた。今回は高齢者に関わる施設見学を主に取り入れたことから、高齢化が進むタイ<sup>8)</sup>にとって、非常に参考になる研修内容であったと述べていた。

また、秋田県と関東地域での施設見学ができたことで、タイの農村地域と都市部との対比の視点から、研

表4 研修生へのアンケート結果

1. 研修期間は十分でしたか。

- ①) 短かった    2) ちょうど良かった    3) 長かった

2. 今回の研修は満足するものでしたか。

- 1) まったく    2) あまり    3) どちらとも    4) すこし    ⑤) とても満足した

3. 今回の研修であなた自身の研修目的は達成されましたか。

- 1) まったく    2) あまり    3) どちらとも    4) すこし    ⑤) おおいに達成された

4. 当大学の設備には満足しましたか。

- 1) まったく    2) あまり    ③) どちらとも    4) すこし    5) とても満足した

5. 宿泊先には満足しましたか。

- 1) まったく    2) あまり    3) どちらとも    4) すこし    ⑤) とても満足した

6. 日本の食事で問題はありましたか。

- 1) あった    ②) なかった

7. 日本の文化について学ぶことができましたか。

- 1) まったく    2) あまり    3) どちらとも    4) すこし    ⑤) おおいに学べた

アンケート結果は日本語に訳した。

回答番号の○は研修生の回答した箇所である。

修経験をタイに活用できると述べていた。

理学療法教育の理解に関する研修目的の達成度は、授業見学が1回だけだったこともあり、さらに多くの授業見学を希望する発言が聞かれた。このことについては、研修期間の制限から、研修内容を保健、医療システムの理解に絞っていたこと、そして本専攻の授業自体が日本語で進められており、常時通訳しながら授業を進めることの困難から、授業見学数の制限が生じた。また研修期間が秋季休業と重なったことも、授業見学の回数に影響していた。今後、理学療法教育の理解を主とする研修生に対しては、言語や適切な研修時期などの対策が必要と考えられた。

当専攻の設備についての満足度の質問では、どちらともいえないという回答であった。今回は研修生のレポート作成のためなどに、当専攻の一室を利用し、常設のコンピューターを使用してもらった。しかしながら、タイから持参したコンピューター周辺機器が日本のコンピューターに対応せず、データの保存や加工ができない事態も発生した。この点については、今後の研修生の受け入れに際して、自国から持参した周辺機器が機能しない場合もあることを事前に伝えるなど、対策が必要と考えられた。

その他、宿泊先の満足度や日本文化の理解についての質問では、非常に高い評価が得られた。特に今回は、ホームステイを取り入れたことで、日本文化の理解に大きく寄与することができたと述べており、今後も研修生の受け入れに際しては、積極的に検討したい。

さらに今回は食事に関する問題は生じなかったが、海外研修生の受け入れに際しては、大きな問題に発展することもある。研修生の宗教や文化的慣習に気を配り、今後もトラブルが発生しないように配慮していくことが重要である。

## VI. 本短期海外研修事業のステージ別の対応

本研修では、23日間の短期研修ということもあり、円滑な研修を進めるために、研修プログラムを大きく準備期、実施期、終了期のステージに分けて、それぞれで適切な対応に努めた。

まず、準備期には、研修生と受け入れ機関が明確な目的を共有し、事前のプログラム把握を徹底することに努めた。電子メールでの頻回のやりとりは、お互いの研修に対する目的意識を構築する上で重要な過程になった。

また、研修が開始された実施期には、プログラムの確認作業とフィードバックに努めた。プログラム開始に際しては、全体のプログラムの確認から始まり、そ

の後は1週間のプログラムの確認、翌日のプログラムの確認と、プログラム内容の確認を綿密に行なった。さらに、1日の終わりには研修内容について、フィードバックを行ない、コミュニケーションを図った。

そして、研修の最終にあたる終了期には、研修生からの研修レポート提出やアンケートなどを通して、研修に対する評価を実施し、研修の成果と課題を明確にした。このことで、研修生が自分自身で研修の内容を整理する作業に繋がり、また受け入れ機関も今後経験に繋げられる作業になった。

## VII. 国際交流・協力に関する今後の課題

海外研修生受け入れの研修成果は、研修生が帰国してから、いかに研修から得た知見を本国に活用しているかが重要である<sup>9, 10)</sup>。この点については、帰国後に研修生の所属する大学で研修報告会を行うことで、知見の共有化を図ることを確認した。今後もフォローアップを行いながら、本研修の長期的な効果について検討していきたい。

また、日本のシステムをそのままタイに導入することは困難であることから、タイの事情に合わせた形で研修成果を応用していく必要があることが、インタビューで述べられていた。海外研修生受け入れは、途上国からの受け入れが主となるため、日本との技術格差により研修による習得技術が途上国で役に立たないこともある<sup>11)</sup>。よって、日本の技術を研修生の国で利用できる適正技術へと転換するなど、研修内容の開発も必要であることが分かった。

さらに、海外研修生受け入れは、学術的な成果だけでなく、研修生の国の文化理解と日本文化の紹介など、文化的交流の場にもなる。今回は、教員との関わりを通じた文化交流が中心であったが、後は研修生のカントリーレポート<sup>12)</sup>などを通して、学生との交流をさらに深められるように、働きかけていきたいと思う。

今回の研修生受け入れを機に、将来的にはコン・ケン大学理学療法専攻と本専攻間の国際交流へと広がっていくことが期待される。特にCBRに関わる共同研究を視野に入れ、友好関係を深めていきたいと考えている。

また、学生の交換留学や学生間の国際交流<sup>13)</sup>、海外研修<sup>14)</sup>、海外臨床実習<sup>15)</sup>など、学生の国際的視野の育成にも努めていきたい。

## VIII. おわりに

今回の研修は、期間的制約、対応人員数の制限などの課題を抱えながらも、研修生の研修目的に合わせてプログラムを遂行する努力が図られたと考える。また、受け入れ機関としての大学のメリットも活かされ、地域のネットワークを利用した幅広い見学をプログラムに取り込むことができたと考えられた。

アンケート結果からは、良好な評価を得られたが、幾つかの課題も指摘された。

今回の研修を通して、我々も日本の医療、保健システムを再確認する機会になった。そういう意味で、海外研修生受け入れは、相互の良い学習機会になったと考える。

今後は、今回の経験を活かし、より充実した海外研修生の受け入れを展開していきたい。

## 謝 辞

今回の研修生受け入れに際して、ご協力頂いた理学療法専攻教員及び関係者の方々に、深く感謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 中西由起子, 久野研二: 障害者の社会開発. 明石書店, 東京, 1997
- 2) 外務省: 各国・地域情勢. タイ王国. (オンライン) 入手先 <<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/thailand/data.html>> (参照2004-10-12)
- 3) 国連人口基金: 世界人口白書2004. 家族計画国際協力

財団, 東京, 2004

- 4) 内山靖, 奈良勲: リハビリテーション各専門領域の国際動向 理学療法. 総合リハビリテーション30: 507-511, 2002
- 5) 渡辺純: 世界の理学療法士の動向. 理学療法白書2000. 社団法人日本理学療法士協会, 東京, 2000, pp192-207
- 6) 田口順子: 国際ステージにおける理学療法士の活動と今後の課題. 理学療法白書2000. 社団法人日本理学療法士協会, 東京, 2000, pp216-225
- 7) 堀内成子, 有森直子・他: 国際協力にむけての看護教育. 看護教育44: 1054-1059, 2003
- 8) 中村優一, 一番ヶ瀬康子: タイの社会福祉. 世界の社会福祉. 旬報社, 東京, 1998, pp51-102
- 9) 村上睦子: 国際交流 —開発途上国との看護交流—. Perinatal Care 夏季増刊: 51-57, 2001
- 10) 鈴木洋子・他: 看護職研修受け入れ. 国際保健医療協力ハンドブック. 国立国際医療センター編著, 東京, 2001, pp216-222
- 11) 丸井英二: 卒後研修生の受け入れ. 医学教育25: 72-74, 1994
- 12) 秋田裕: 横浜リハセンターにおける海外研修生の受け入れ状況. 第10回記念海外技術協力セミナー. 東京, 2002, pp34-35
- 13) 安村建介: 医学生レベルの国際交流システム. 医学教育25: 105-107, 1994
- 14) 牧野俊郎, 山本保博: 課外に学生を東南アジア諸国へ. 医学教育25: 98-100, 1994
- 15) 田村昇, 井上有希子・他: 卒前カリキュラムの一貫としての海外臨床実習. 医学教育25: 84-87, 1994

Effective Approach to Short-Term Training Activities  
in International Exchange  
— Experience with a Trainee from Thailand —

Yukihiko OSAWA Shunsuke KUDO

Course of Physical Therapy, School of Health Sciences, Akita University

We received a physical therapy trainee from Thailand for a period of 23 days from 24th September 2004. The purpose of this paper is to share our experience in order to contribute to the development of an effective program of foreign training for the future. There were three purposes to the program: that the trainee gains knowledge and skill to improve community health activities in Thailand, understands physical therapy education in Japan and learns about Japanese culture. Questionnaires taken from the students in order to evaluate the program showed that they considered it to be meaningful and the trainee was satisfied with the content of the training. In the future, we hope to develop the relationship with Khon Kaen University to implement cooperative research in CBR and an exchange student program.